

=つっちー&ゆっきー通信=

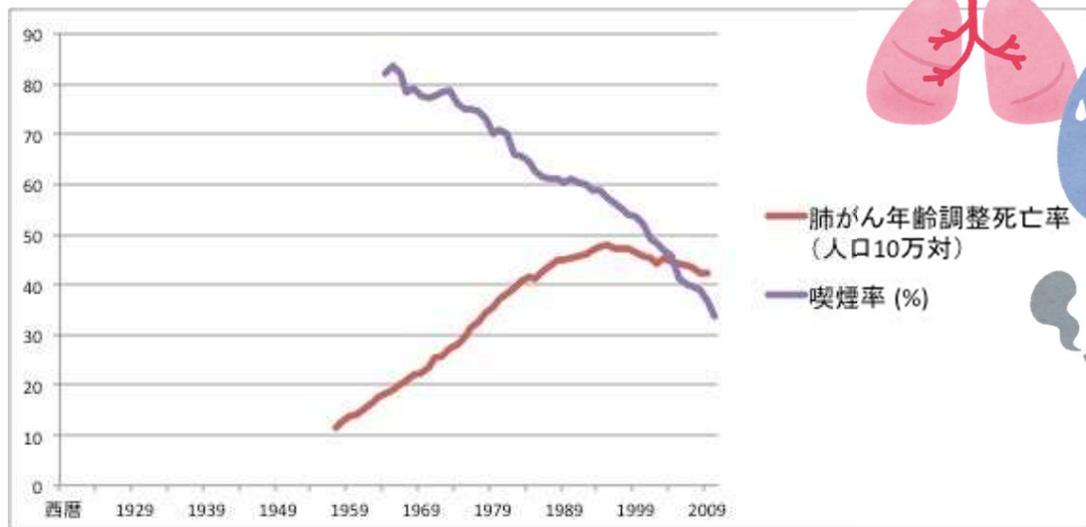
喫煙による肺がんとアルツハイマー病について

～ 院長 土田晃靖 ～

前回 1 月号で、『タバコの害とCOPD(慢性閉塞性肺疾患)』について説明しましたが、**タバコは肺がんやアルツハイマー病の発症にも大きく影響してきます。**

がんというものは高齢になると増えます。したがって人口が高齢化するだけでも、がんは増えます。日本は現在急激に高齢化が起きており、それだけでも肺がんは増えていきます。そこで、本当に肺がんが増えているのかを比較するには、年齢構成を補正した肺がん年齢調整死亡率 (人口 10 万対) というものが使用されます。

■ 喫煙率と肺がん年齢調整死亡率



肺がんに限らず、がんが増えてきているのか減っているかとの論議をするには、疫学的には年齢調整死亡率で比較していますが、高齢化を考慮すると上記グラフのようになります。ここでは 1996 年をピークに肺がんは減少に転じているのです。これは、喫煙率が減った影響が出てきていると考えられています。

喫煙率のピークの 1966 年から 30 年後、一人あたり消費本数のピークの 1977 年の約 20 年後の 1996 年に肺がんの死亡率がピークとなって減少しています。つまり、**喫煙と肺がんの関係は日本人全体を実験の対象として証明された**と言って良いのです。

■ 喫煙はアルツハイマー病の発症年齢を低下させる

アルツハイマー病では脳内の神経伝達物質のアセチルコリンが減少しているという特徴があります。アセチルコリンが神経を刺激する時の受容体はニコチンによっても刺激されるので、タバコのニコチンがアセチルコリン神経を刺激すると考えられています。

ストレスは脳細胞を死滅させ、ぼけを促進します。喫煙はストレス解消に役立つと考える人が多いが、これも喫煙がアルツハイマー病を予防する理由の一つとされ、事実、喫煙者に家族性アルツハイマー病を防ぐという論文も発表されましたこともありました。しかし、我々の多くを襲う散发性のアルツハイマー病の予防に効果があるという報告はほとんどありませんでした。つまり家族性アルツハイマー病のデータが拡大解釈されていたのです。最近、英国で 3 万 4000 人以上の男性医師を約 50 年間追跡調査した結果が報告され、それによると**喫煙はアルツハイマー病や血管性の痴ほうを抑制する効果はなく、むしろ発症年齢を低下させることが示されました。**